
消えた凶器

梅檀馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた凶器

【著者名】

梅檀馨

【コード】

N8487Z

【あらすじ】

ちょっととしたきつかけからトリックを用いたミステリを書いてみようと思い立ち、作ったのがこの作品です。

小説形式を取つてはいますが事実説明に偏つてるので、「よし解いてやるうじやないか」という情熱のある方、または細かい文章でも平氣だよ!という方にオススメです。

前 事件発覚と謎の提示（前書き）

前編にて問題文、後編にて謎解きと二つ形式にて展開して参ります。

少しでもお楽しみいただければ幸いです。

前 事件発覚と謎の提示

K町のビジネスホテルの一室で女性の遺体が発見されたその日も、町は最低気温マイナス15度という寒波に覆われていた。

マイナス15度ともなると空気が肌に痛く、鼻の粘膜が中でくつついてしまい、耳などを露出させているとともにすれば凍傷になる。ところがこの町ではこれが当たり前の冬であり、河川の水も今時期は氷や雪に厚く覆われる。K町は名づけての寒冷地帯に位置し、豪雪でも知られていた。

殺されたのは遠方の都会M市の商社に勤務する営業職の社員で、かねてより進めていた商談の為同僚3人と共にK町に出張しており、業務をこなしようやく帰社が適う前日の出来事だったという。

活気溢れるというにはほど遠いK町ではあったが、5階建てのホテルは小規模ながらも手入れが行き届いており、部屋は全てオートロックだった。窓はレバーで外に開ける片開き式。被害者の女性が泊まっているのは2階であり、窓は建物の裏側に面していた。

死亡推定時刻である午後11時はただでさえ泊り客が少なかつた上に、彼女を含む四人は翌日早くに出立するというので、午後8時40分頃には各自の部屋に入ったという。全員での外出は午後7時に一旦チェックインして以来、7時30分に食事に外に出かけ、かつきり1時間後に戻っている。偶然にもその日の泊り客は調査の結果いざれもアリバイが証明されて、最後には同僚3人が被疑者となつた。

遺体は鈍器のような物で頭を殴られており、死因は頭部損傷による脳挫傷。そう多くはなかつたが、外部に出血及び打撲痕が認められた。14平方メートル程度のユニットバス付きのシングルルーム。壁際に設置されたベッドではなく、中央の床に下着姿のままでうつ伏せに倒れて亡くなっていた。

発見されたのは、翌朝のチェックアウトに集合しないと同僚が不

審がつて見に行つた午前8時15分である。部屋の暖房はついたままで暖かかった。遺体の傍にはガラスコップが転がつており、床のカーペットも少しまだ濡れている。

鑑識の報告に拠ると、液体は被疑者の血液が少量混じつた單なる水だという。部屋にはその他机に姿見、テレビに冷凍室付の小さな冷蔵庫が置かれていた。指紋は被害者のもの以外は発見されない。犯人が拭き取つたものと思われる。

しかしここで、大きな問題が生じて警察は頭を捻つていた。凶器がホテルの内部及び被疑者の部屋からも荷物からも、被害者のそれからも見つからないのだった。そして一階という低階層であるところから外部犯の可能性を考えても、窓の下の雪に何の跡もなく、ホテルの従業員の話からしても夜6時以降雪は降っていない。そもそも窓は内側からしっかりと鍵が掛かっていた。ロビーからの不審な外部の訪問者がいなかつたとは、従業員が証言している。

また、館内の全ての非常口もまた内側からしっかりと鍵が掛かっていた。一階の端に設置された非常口の扉の外も念のために確認したもの、やはり足跡めいたものは見つからない。こんもりと積もつた柔らかい粉雪があるばかりだ。

そこで警察は同僚3人に標的を絞つて、被害者との関係の詳細や所持品の検査を行つた。

結果、それぞれ被害者とは公私いずれかでトラブルを抱えていて、誰もが動機を持ちうるとわかつた。

同僚Aは被害者の後輩であり常日頃陰湿ないじめを受けており、憎しみをほのめかしているのを別の同僚が聞いているという。

同僚Bは過去に被害者と交際関係にあり、ひどい振られ方をして恨んでいたそうだ。

同僚Cは仕事上で被害者と度々揉めており、上役に当たることもありしぶしぶ従つてている。今回の商談でもついこの間口論になつたらしい。

各人の荷物をまとめると以下の様になる。

被害者：着替え、化粧品、ノートPC、財布、携帯電話、毛糸のマフラーと手袋

同僚A『女性』：入浴・洗面用品（ボディタオル・ソープ・洗顔料）、着替え、化粧品、ソーアイングセット、財布、携帯電話、ノートPC、フェイクファーの耳當てに毛糸の手袋

同僚B『男性』：着替え、筆記用具（シャープペンシル・消しゴム・ボールペン・メモ用紙）、財布、携帯電話、ノートPC、毛糸のマフラー・手袋

同僚C『男性』：着替え、デジタルカメラ、毛糸の帽子と豚革の手袋、財布、携帯電話、ノートPC

これに補足事項として4人それぞれの携帯電話の通話記録なども調べたが、犯行当日に被害者に連絡を取つたのはAが午後8時半に彼女に電話したのが最後である。しかしこの時間以前にBもCもそれぞれ電話をかけており、社用電話私用電話いずれにも疑わしいメールや記録めいたものはない。

被疑者たちは警察の質問に対してもうように答えていた。

A「それは確かに　さんは厳しい先輩でしたけど、だからといってどうこうしようなんて思いません。……え？　なぜ入浴用品を持つているのかですか？　私、敏感肌なんでホテルのアメニティがどうも合わなくて。いつも小分けにして持ち歩いているんです。とにかく、昨夜は疲れていましたし10時にはベッドで休んでいましたよ！　8時半に食事からここに戻る前には近くのコンビニに行きましたけど。皆さんとは5分遅れ位でホテルに戻りました。電話は、さん何か要るものあるかなと思いまして……よく、後で文句言われるんです。気が利かないとか。でも断られましたけど。……何を買つたかですか？　アメとか、チョコレートに缶コーヒーです。疲れた時にと思って。売店のものが気に入らなかつたんです。お疑いでしたらレシートをお見せしましょうか」

B 「もつあいつとは終わつたし、大体があんな女殺す価値もありませんよ。それに俺、次の辞令で別部署に移動予定だし、栄転なんです。どうしてわざわざそんな大事な時期に、殺人なんて。そりやあ確かにこの出張は正直イヤでしたよ。3日間ほぼあの女と顔付き合わせてましたから……もっとも、それは他の2人も同じですがねえ？ 昨晩の外出？ しませんでしたよ。10時過ぎに1階の売店前の自動販売機でペットボトルのジュースなら買いましたけど。…見させてくれと言われましても、もう飲んで捨ててしまつたので良ければ」

C 「 はキツイ性格だし、まあ仕事ではいつも衝突していましたね。今回の企画だつて、最初は俺が主導で進めていたのに、結局アイツに奪われて……でもそんなのいちいち気にしていたら生き残れませんよ。外出？ ホテル内でちょっと迷つたぐらいで、ずっとホテル内にいました。残念ながら、食事から戻つてからは一人だから証明は出来ませんが……え？ 何で迷つたのかつて？ 実は寒さのせいかトイレの水の流れが悪くて、共有のトイレを探していました」

刑事はそれぞれの証言の裏を取りにコンビニエンスストア、売店などに向かつた。

コンビニのレシートは時間帯も印字しており、店員も客が少なかつたので彼女のことを覚えていた。最初パック飲料を物色していたが、きびすを返して缶コーヒーと菓子類を持ってきたという。

売店は9時までだつた為に証言は得られなかつたが、部屋に捨てあつた空のペットボトルと同じメーカーの飲料は確かに販売機でも売られている。Bの指紋も確認された。空のペットボトルからは不審な物質は何も発見されなかつた。

そしてCの部屋のトイレの水の流れが良くないことも実際に証明

された。スーツ姿で建物端にある共用トイレに向かってうろつろ歩く彼が、館内数箇所ある監視カメラにも午後7時20分と同25分、10時35分と同40分の計4度映っている。

同様に他の2人も、Aは8時40分Bは10時05分と同10分に廊下を歩く姿が記録されていた。しかしここでまたしても警察は壁にぶち当たる。

肝心の被害者の部屋の廊下も確かにカメラは映していた。死亡推定時刻の少し前、被害者は自ら戸を開いてある人物を招き入れていたのだった。

頭に布のようなものを巻いた、部屋に用意されている浴衣を着た人物を。

厄介なことに背の高さは3人ともほぼ同じ。Aが少し華奢ではあるが、それ以前に画像の人物はその3人の誰よりも太って体格が良かつた。

どうにも決め手に欠けて刑事がもう一度被害者の泊まっていた部屋を眺めていたその時、彼はゴミ箱に目を留めて目を剥いた。

さて、この事件の犯人は一体誰なのか。そして凶器はどこへ行ったのか。

ちなみにそれぞれの部屋にほとんど備品を使用した形跡はなく、ゴミ箱にいぐばくかの千切れた紙ゴミがあつただけである。冷蔵庫の中も空のままだった。

「これは計画的な殺人だ！ 昨日今日で用意されたものではあるまい。恐らく犯人は、事前に綿密な調査をした上でここを犯行に選んだのだ」

どうやら刑事にはわかつたようである。

彼は一つの仮説をもって、この後ホテルにてある作業を行つた。そしてようやく凶器が何かを知ることとなる。

後編に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8487z/>

消えた凶器

2011年12月26日22時00分発行